

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 12 月 5 日	
所属部局・職	霊長類研究所・特定研究員
氏名	宮本 陽子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
鹿児島県熊毛郡屋久島町 (屋久島)
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
JMC 屋久島研修
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 11 月 24 日 ~ 平成 28 年 11 月 27 日 (4 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
杉浦秀樹准教授 (京都大学野生動物研究センター)
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。
【目的】 日本モンキーセンターで継続して実施されている「屋久島研修」に参加し、野生のヤクニホンザル、ヤクシカの生態、その生息環境について観察を行い、ニホンザルの本来の生態について理解を深め、飼育下ニホンザルの飼育環境向上につなげる。また、派遣期間中に開催される屋久島学ソサエティ第 4 回大会へ参加し、屋久島に関連する研究者や地元の方と意見交換を実施する。
【同行者】 早川卓志 (日本モンキーセンター・京都大学霊長類研究所)、星野智紀 (日本モンキーセンター)、平栗明実 (京都大学霊長類研究所)、川端裕人 (ナショナルジオグラフィック)
【日程】 2016/11/24 ニホンザル観察 (主に西部林道) 2016/11/25 ニホンザル観察 (主に西部林道) 2016/11/26 屋久島学ソサエティへ参加 (屋久島町総合センター：安房)、ヤクスギランド・紀元杉見学 2016/11/27 白谷雲水峡見学
【研修報告】 1 日目は屋久島に到着後、滞在先である PWS ハウスに向かう際に通った西部林道において、早くもサルとシカに出会うことができた。20 頭弱の群れであり、横サルは車やヒトになれており、1m ほどの距離しかとらなくても平然と生活している。クスノキを地面にこすりつけている個体、木の上で木の実を食べる個体、毛づくろいする個体、道路に寝そべりくつろぐ個体等、各々が自由に過ごしている姿が印象的であった。左後肢を欠損した個体も発見したが、特に問題なく群れで生活しているようであった。また、サルの群れの近くには数頭のシカも観察することができた。 1 日目の夜には、京大の拠点のある永田地区の民家で屋久島滞在中の大学院生・研究者とも一緒に郷土料理をいただいた。その民家は屋久杉の建築物で、また釘を使わず作られたと聞いた。食材はもちろん、テーブルに飾られたキクも屋久島で自生しているものであり、初日にして屋久島を丸ごと堪能した気分になった。 宿に帰った後には、実際にフィールド研究をしてらっしゃる研究者からシカがサルに毛づくろいをねだり、それに応える子ザル、シカの身体に乗るサル等の貴重な映像・写真を見せていただく機会があった。また、個体識別のための各個体の特徴、群れの構成等の情報に関する記録も見せていただき、フィールド研究というものを少し感じることができた。食物となる植物についても教えていただき、リュウキュウマメガキ、シロダモ等を実際に試食し、サルとの味覚の違いを実感した。クスノキについては種を食べる個体と皮を食べる個体に分かれるが、これは人工的に植えられた種であることから食べ方が安定していないのではとのことであった。
別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真 1：サルとシカが混在している中を車が通る

2 日目は朝から西部林道に向かい、サルの群れを探した。前日夜の予習で狙っていた群れは道路に出てきていなかったが、川原地区の日のあたる道路で複数組が毛づくろいに励んでいる群れに出会うことができた。

この日は道路からはずれ、照葉樹林の中に入っていったが、道中遠くからサルの鳴き声があったものの、サルを追跡することはできなかった。当たり前のことではあるが、道路とは異なり地面は悪く、落石や手すりにした木が折れてしまうという危険を実感することができた。また、以前にヒトが住んでいた痕跡とみられるカマドの跡や研究者の使用している定点カメラを偶然見つけることができた。



写真 2：ガジュマル（西部林道）



写真 3：西部林道をはずれ、林を進む

西部林道を抜け、栗生側の世界遺産境界を出たところで、40 頭近い大きな群れに出会った。西部林道内の群れと比較し、ヒトにより慣れていた。同行者のビニール袋の音に反応したことから、観光客による餌付けの影響があるかもしれない。サルは海に面する道路の日向でシロダモの実を食べながらくつろいでおり、忙しく毛づくろいに励んでいた。普段接している飼育下のニホンザルと比べ、毛づくろいをする側、される側の交代が早く、とはいえ 2 頭でずっと交代しながらやっているわけでもなく、他の個体が介入してくる様子が目立ち、複雑な構図であった。一見日向ぼっこをしているのだが、「とにかく忙しく動いている」という印象を持った。



その後、大川の滝に向かい、雄大な自然を感じながら休憩を取った。雨のイメージの強い屋久島であるが、重点的に観察を行った前半 2 日間は天候に恵まれた。

休憩の後、再度西部林道に向かい、道路側からの観察を行った。1 日日夜に映像で見た「サルとシカが接触様子」を見るべく全員で狙っていたが、サルとシカはお互い近くまで歩み寄るだけであった。シカは、サルと比較してヒトの動きや物音に敏感であり、何かあると多くの個体はヒトから距離を取るか、林に消えていってしまった。

写真 4：世界遺産境界（栗生側）背景に口永良部島

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真5：忙しく毛づくろい



写真6：電線で移動（ヤクスギランドへの道）

また、興味深かった様子として、車が通った後やヒトが物音を出した後に交尾行動が見られたことがある。数回このような場面に出くわし、危機を感じると子孫を残そうとするのかと皆で感心した。

3日目の午前中、屋久島学ソサエティに参加した。生物に限らず、屋久島の歴史や地理にいたるまで幅広い分野の発表に触れることができた。ヤクシマカワゴロモという藻の研究者からのその研究手法や目的を伺ったり、野生動物研究センターの杉浦先生のご発表に対して地元の方から昔の屋久島の人の生活形態についてお話を伺ったりすることができた。

午後はヤクスギランドに向かった。西部林道よりも標高が高く、針葉樹林帯であり、多くの太い杉を観察することができた。ヤクスギランドに向かう際にもサルを観察することができ、電線を上手に伝って移動する様子が飼育下でゴムロープの上を移動するサルの様子に重なった。ヤクスギランド内でも数頭のサルに出会ったが、すぐに林に消えてしまった。ヤクスギランドを出て紀元杉に向かう際には、霧が深くなり、山特有の天気を感じることができた。道中10頭程度の群れに出会い、その群れは私たちが紀元杉の観察を終え帰ってくるまで1時間近くほぼ同じ場所に滞在していた。ここで出会った個体は、西部林道の個体よりも身体のサイズが大きいように思った。

夜は、屋久島学ソサエティの懇親会に参加した。研究者だけでなく、写真家、博物館勤務の方等多様な方とお話する機会を持つことができた。



写真7：白谷雲水峡散策

4日目は朝から白谷雲水峡に向かった。この日はついに雨が降り、川の増水により立ち入ることができない場所があり、1時間程度の弥生杉コースを中心に散策した。西部林道とヤクスギランドの中間くらいの自然環境であり、照葉樹、針葉樹が在しており、杉もヤクスギランドで見たものほど大きくなかった。

受付で「サルはあまり出ない」というお話を伺っていたの期待していなかったが、メインの弥生杉近くでハナレオスとわれるアダルトオス個体1頭に出会うことができた。雨の影か観光客も少なかったことから、運良くサルに出会うことができたのかもしれない。



写真8：雨にも負けないサルたち

白谷雲水峡からの帰りの道路でも小さな群れに出会うことができた。雨の中でどのように生活しているのかと興味を持ったが、雨があまり強くなかったこともあり、時折被毛について水を飛ばす程度で、晴れの日と似た生活をしていた。

雨のイメージの強い屋久島で3日間は天候に恵まれたこともあり、大変有意義に過ごすことができた。これまで野生のホンザルを見たことがない状態でニホンザルの飼育に携わっていたが、この研修で本来の生態や食性について理解を深めることができた。普段接している飼育下のニホンザルよりヒト慣れた様子の西部林道のサルには最初驚いたが、反対に飼育のサルもここまで慣らすことができると思うこともできた。また機会があったら、本土の野生ニホンザルの観察もしてみたい。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



写真 9：皆様と PWS ハウスの前で

(写真提供：川端裕人氏)

最後に、案内役をしてくださった早川先生、豊富なご経験から楽しいお話をたくさんお聞かせくださった川氏、また 4 日間ずっとサルと一緒に追いかけて、素敵な経験を共有してくださった星野氏、平栗氏には心より感謝申し上げます。

6. その他 (特記事項など)

本研修は、PWS リーディング大学院プログラムの支援によって実施されました。

貴重な機会を与えてくださいました松沢哲郎先生、湯本貴和先生、岡本宗裕先生、現地でお世話になりました杉浦秀樹先生、松原幹氏、大学院生の中村泉氏、肥後悠馬氏、快く送り出してくださいました中村克樹先生をはじめ関係者各位に感謝申し上げます。